

何でも読もう会

書物名	一月物語	開催日	出席者
作 者	平野啓一郎	6月19日	4名
平野啓一郎の作品は、「マチネの終わりに」「本心」に続いて3作目になる。平野はメンバー誰もが認める注目の作家である。 吉野に行こうとする青年が奇怪な老人に出会い、鴉揚羽にも迎えられて、熊野古道小辺路に歩き、上西の旅籠に投宿（現在は上西家跡とされ、休憩所になっている）。翌日は自然を味わいながら奈良県往仙岳付近に迷い込む。（行仙岳かな？） 伯母子峠は難所で、道に迷い毒蛇に噛まれ、山中に住む僧侶に救われ、怪我治療まで人里離れた山寺で過ごす。そこで毎夜、月下で水浴びする美女を夢で見る。これは幻想なのか、現実なのか。 僧侶から癩患者の老婆がいる小屋へは近づくなと禁ぜられたが、そこに何か秘め事があると思い、禁忌を破った。そこには・・・高子。 五百瀬の宿で聞いたその地の奇譚から、再び美女・高子に会いに行く。見毒により、蛇の娘の高子と目を交わすと命を落とすとされるが、青年の恋はそれをものともせず、「来ないで」の声を聞きながら「その輝く晴（ひとみ）で射貫いて下さい、深く…、私を…全てを！…」高子の残した血溜りより、一匹の胡蝶が舞い上がった。 青年が求めてきたのは、愛なのか、死出の旅か。拒む愛と求める愛。あの世かこの世か。夢か現実か。いいや、そんなことを考えなくていいのだ。多忙な毎日から逃れ、幻想的な吉野の山中で鴉揚羽の誘いのままに夢を見ていればいいのだと言っているように感じた次第。 平野の提唱する『分人主義』の表れか？ 参加者から、熊野古道の最も厳しい小辺路の話やら、逃れてきた天誅組、十津川氾濫で集団移住して北海道の新十津川村誕生の話やら、そして現在は日本一長い路線バスが奈良の近鉄八木駅から十津川を経てJR新宮駅まで、約6時間かけて運行されているという話やらで、大いに盛り上がった。 この後の季節の料理と酒が美味しい！！			